



橘菴漫筆

二編

貳

陸
五
七

15
348
7



門 1 曾 5
 號 348
 卷 7



坊 過 東 濟 長 松 鏡 牛 菴
 過 西 經 沙 風 之 漫
 書 船 儀 考 村 南 天 筆
 船 儀 考 雨 天 燭 二
 四十四 四十二 四十 三十八 三十六 三十四 三十二 三十 二編二目錄

食 手 紅 大 花 蓮 久 蜻
 手 夢 液 黑 の 社 章 蛉
 夢 液 庵 香 沖 規 範
 四十五 四十三 四十一 三十九 三十七 三十五 三十三 三十一

明治三十四年七月五日

由雄成氏寄贈



扇 あき 掛 か 四十六
 塩尻 しほじり 記 き 四十八
 鰯頭 いわしづら と 林 はやし 五十
 長 なが 尻 しり 五十二

松漬 まつづけ 番 ばん の 物 もの 四十七
 野 の 瓶 びん 四十九
 師 し 屋 や 五十一

[Faint handwritten text in columns, mostly illegible]

[Faint red vertical stamp on the left edge of the page]

文教

揚菴漫草二編二

田仲宣編



① 馬の陽気の偏るるものなり牛は陰気の偏るるものなり
 金木の氣を以て牛の氣を以て陰氣の偏るるものなり
 金木の氣を以て馬の氣を以て陽氣の偏るるものなり
 牛の性の純然に陰陽の偏るるものなり
 馬の性の疾く陰陽の偏るるものなり
 馬の疾く剛も柔もや陽氣物て柔なるものなり

西丹個馬（西丹の馬）又出るの強剛（強剛）は性（性）疾く人を突（突）め有備中（有備中）は
後（後）置長州（長州）をこの半（半）に性意願（性意願）はしてはるはこれ陰守（陰守）は備
とゆるゆへ西（西）より行性（行性）は水中（水中）の物ら志（志）むるこを山（山）をく
人を陰陽（陰陽）の事（事）は具足（具足）して生（生）育（育）する方（方）位（位）偏（偏）は
馬（馬）に駁（駁）多く半（半）に果（果）也（也）の事（事）も陰陽（陰陽）の理（理）は山（山）豈（豈）極（極）
をからざるんや

③蜻蛉（蜻蛉）とて人（人）と云（云）大坂（大坂）とて人（人）まとも國（國）よりて人
とげんごとまへ（とげんごとまへ）の事（事）は転（転）く来（来）まる事（事）のこと
吳山（吳山）が物類（物類）揃（揃）はずよ（よ）く出（出）せりま（ま）くも（も）はとて人（人）は

ハ二つのもとのたつよや人（人）まへにらあるゆへ（ゆへ）は事（事）おとる人（人）と
轉（転）んとてや人（人）まへをゆへ（ゆへ）とて人（人）まへに翼（翼）の山（山）
有（有）の文（文）は蜻蛉（蜻蛉）の外（外）山海（山海）徑（徑）の志（志）は眼（眼）おにる事（事）のほ
其（其）翼（翼）は有（有）とて人（人）まへに水（水）は事（事）は蜻蛉（蜻蛉）とて人（人）まへに
陰（陰）の純（純）陰（陰）と具足（具足）せり其（其）蜻蛉（蜻蛉）の形（形）は出（出）はして水（水）は
の象形（象形）とて人（人）まへにこれとて人（人）まへに
④ 後（後）の表面（表面）に南天（南天）燭（燭）は付（付）く事（事）は其（其）明（明）る事（事）は人（人）は象
表（表）せり南（南）の離（離）はして離（離）る事（事）は明（明）なる事（事）は
天（天）之（之）乾（乾）る事（事）は明（明）貴（貴）なる事（事）は
卦象（卦象）は明（明）なる事（事）は明（明）なる事（事）は

用せしと新しういほまも明く貴く兼く美しき家なり

よみて鏡の裏に書付たり

世本朝昇平の年又美事多し事云もさなる今時
板行るし書籍凡そ都より六万部に満ちて教養万巻

と云ふは必まらば僅に百年はる板行出来しと日れど

昇平の餘澤とやいふ人昔懐高き生人送られ書に

は頃々文章規範に入平他々の本懐と遂に門人守りも

寫させ申候合ふる書れと云ふもその書の予り中

又多規範一効と求むるかたし今や集大成せしむ

中より泰平の流福作るべ孫らるる際いよく海に

岸をくると何れも思ひ及ぶと人々念歎はまらざらぬや

世松岡村の史実を記して定むるなりは平陽

頃唐とてくふと云ふ源氏の事蹟に確しるよう如事

のその源氏の源氏の史記の史記とて附會して松風の

伝曲を作りしより野史雜劇の又いふりて虚証を後

行平源唐の位位との間を敷くるとして朝の松風の夜

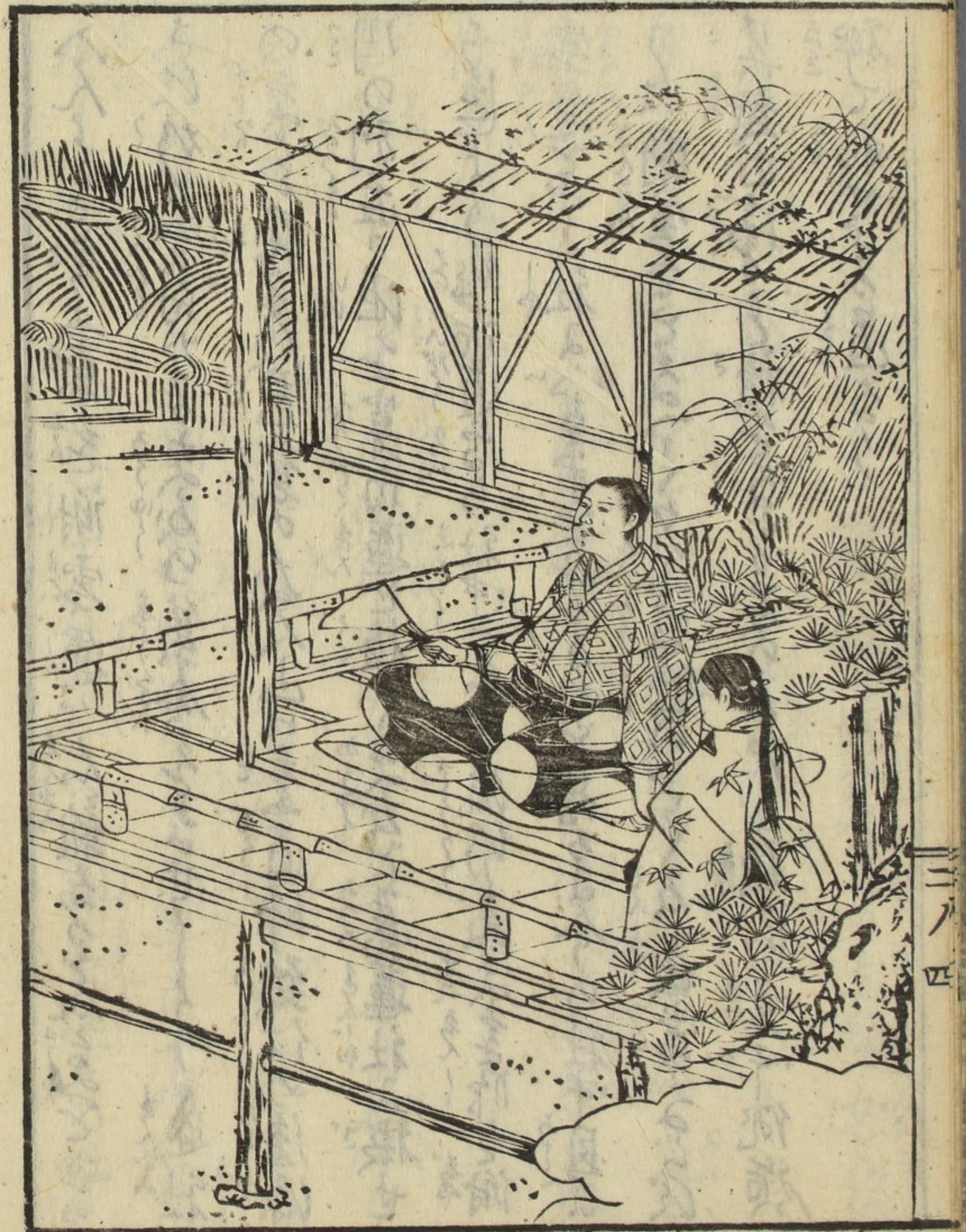
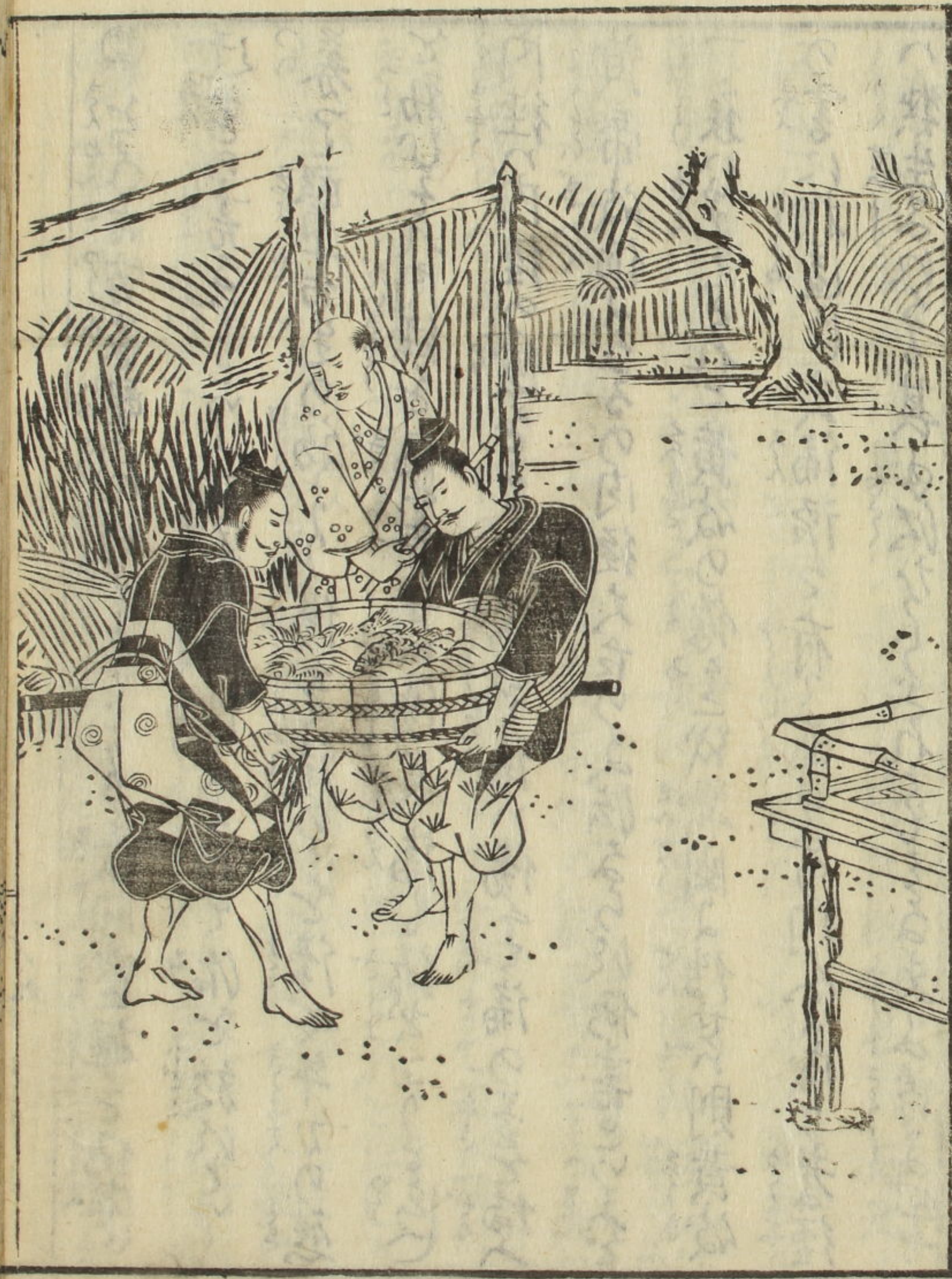
まよふ言伝るると書きたのり折るぬきて村の夜事家

をいと書とよむむと風雅の骨髄を述く位位は事家

二人の松尾村西と云は隆波の坂列衣足あつきれあしの赤髪あかかみ女むすめと後
多て作つく文ぶんの筋すぢををるるより多いれまきき清きよ高たか松まつ在ありますまと
りかかんきんかん狂きやう毒どくのの流りゆうををぶぶ山さん後ご禪ぜん史しととええりり知ちるるをを
収とりりののままががらら貨か賣ばい本ほん酒しゆの本ほん朝あさとと後ご人ひととと迷ま惑ごつととに
便べんをを引ひ連れん）

社しゃ中ちゆうとと云いふふ事こと此こゝ須す陀た滑くわ者しや流りゆうのの流りゆうとといいふふ社しゃ中ちゆうと
云いふふ山さんのの惠ゑをを法ほふ師し庭てい際さいのの盆ぼん池ちとと白はく蓮れんとと植うててその
合あとと白はく蓮れん社しゃとと劉りう遺い民みん雷らい波は字じ宗そう柄へい等とうのの十じゅう八はち人にん集しゆ
命めいががててままををるるははこれこれとと十じゅう八はち蓮れん社しゃとといいふふ謝しゃ雲うん運うんそのその社しゃ

入いんんととををととくく入い惠ゑをを謝しゃ雲うん運うんハハ人にん難なんあるあるとといいふふことことある
ささらら初はつめめのの契けい向かうかかるる交かう友ゆうのの集しゆ會かいををととまませせりりよりより蓮れん社しゃ
のの末まつとと云いふふままにに芭ば蕉せうのの友ゆう人にん山さん口こう孝こう道どう師し致ち仕しのの後ご源げん
川せんのの別べつ荘しやうとと池いけをを穿ありり白はく蓮れんとと植うてて交かう友ゆうとと集しゆ蓮れん社しゃとと撮とりりせ
ららはは是こゝよりより能とく滑くわ道どう者しやらら社しゃ中ちゆうとと云いふふ事こと流りゆうけけぬぬままをを師しをを謝しゃ
雲うん運うんとと云いふふ社しゃとといいふふ事ことををゆゆらられれどど終まつるるはは今いまのの社しゃ中ちゆう目めとと
ハハ断たんん金きんををととまますすりり小せう冠かん雙しやうののどどくくるるもも後ご常じやうとといいふふ
吳ご越ごつとと隔へきとと接せつををままぐぐるるののどどれれもも款くわん良りやう呼こ呼こ能とく滑くわ
押おてておおせせざるざる道どうちちりり



⑤ とも古が家醫術のりとしてより素回靈樞を依るに
 けきをの書まきとして不用唯此より治と能く
 券了醫書生の物より傷を痛のをも後て牛刀の能
 と勅いその内経を依書とせば傷寒論も依るなりと云べ
 内経の内経の徳をそとへ傷寒論の傷を痛のをも依る
 黄帝岐伯なるの内経大古の文法ならび依書といふと
 一復の書えれど黄波の能を以て戦國の傳せば則黄波
 の書に相違は夫痛語を有る曹子の門人なり成り考經
 の樂生子なる其は以たりとれどもまゝ子曹子の書

に相違は其傷寒論へ長沙を守張機仲景の自序
 にも孫叔和書たり不謂る後漢書及陳武が二國志と
 同る先は後漢の初平二年長沙の守孫堅死 策 橙
 建安三年長沙の守張羨荆州の劉表も亡る羨は
 南陽の人と有て傳もんえは建安十二年ちて荆加ハ
 劉表が有るしと曹操に保られ魏の韓玄これを守し
 赤壁の役より韓玄長沙を蜀王劉備も降る又劉巴
 傳もち劉表死に曹操劉巴を征ひ劉巴雩陵挂陽也
 也と曹操も加納と後先主これを略して蜀の有るはと

蜀志に出たり又孫貴が傳は長安長安義兵右のどく
 見えられども張仲景と云人傳やとい事実をえ侍らば疑
 らくは南陽の張羨が本と張機と何會せるは張羨建安
 三年に亡びたり建安紀年と書ハ一紀十二年の内とて
 而して漢の事なきは疑らるる傷を痛の廟を有を王叔
 和撰次と機が名を誤りたり先それハ皆を並て内
 徑も傷を痛も何書らば何かにと博く漢撰して
 術も書くくたる候も學に上古天真痛も陰陽夜家
 大痛も胡椒丸のそいと素人の才多し人又尋られく躑躅

よるも是道漢は清土の又義なるも古又孝經大切
 かる書と孫逸本致り送りしと云ふは彼地ハ附會杜
 撰暢と事とあり張仲景が事も術やく羅貫仲
 が演義三國志のそんえと事と唐のハ文會との稗
 史も書くは信用とらにそとて
 (七) 雜劇のよといえどつた作は拵加後迄搦供養と云
 淨海理の琴の候とつたのせよはと云ふ九孫の枕のゆり
 いろよき夏のおもとや又よはは種もよきと云て思をせし
 時こそは種やうもておそり秋の央の長のおも今

骨はくさう 經う死にに かき 終るのまらせやと 佐もつ 初
 夏の夜も 夏よかきと 後 秋の央に 長の夜も 經じと
 しま 打ちのらうと せき せきと 又 法へ 有と せ 初
 のは 又の 地さう 用 後の 其の 祈を いた 友 時 儀の 現在と 云
 たり 秋の 祈さう 用さう 其の 法の 用 於と せ 法 有て
 今 的の 劇と 六日 紙は 巻じて 終る

廿八 赤めく 献たふ ひらけ 洋に なる なる なる なる なる
 かさる こと けつと 或人 といさう かな 祝 謝 礼 束 脩 の 類 と な
 齋 物 の 書 付 に お け ざ け 祝 儀 と 書 け 本 朝 實 實 乃

國風 なる なる 業 振 人 振 なる 野 早 なる なる なる なる なる
 脩る 束 脩 なる 祈 なる 祈 なる 祈 なる 祈 なる 祈 なる 祈
 より 脩 儀 と 經 儀 着 轉 して 相 似 なる 由 え 終 經 儀 と 轉 せ
 る べし 師 家 なる なる 束 脩 儀 と 祝 儀 家 と 謝 儀 と 祝 儀
 儀 度 儀 なる なる 事 なる なる 自 祝 の 事 の 祝 儀 なる なる
 なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる なる
 武田 因 懐 守 仲 村 武 田 信 光 の 裔 なる 退 隱 なる 武 師
 紹 臨 なる 後 なる 系 初 室 所 なる 系 なる 住 せ なる 家 宅 なる 我 の
 社 又 清 臣 なる 大 黒 彦 と 自 称 なる 其 清 經 見 なる

① 副場の見物と信じるに東西くとも事羅大徑が鶴
林玉を海より見えそり

② 紅藍液と燕脂と云々久し紅をまきと殷の姫已燕紅を
天下に冠するをゆて用ひて脂とまじこれよりして燕脂と

り清土の昔も紅花の北方の物より紅を本羽羽の如く
上山形本澤などの産むは唯紅花を小園耳に紅

③ 過書船の思代の御国初は有功の下民を清を之清
清仁徳と布る事清に時と初は後をて清を之清

る書と云ふと人清の按どるは唐書の令に清液

開洋及乗船は上下経洋者皆當有過所と云ふ又順
和名抄にも出たり又天通船と稱どもも渡後船渡
なほ昔の渡り舟渡難波の多船世に渡船といふ
志と伏見の城船名昌のとれより伏見福清の地より激と
越くしるる唐書にいえる過節は配當て過書とるべき
④ 事多端にそ繁く又元祿區にいて史記がま
時とよびつるをばるといへりいなる事とやとねりひし
振羽多庫の西高藤が林の沖の海底より昔と標と
云りの出づる順和茶人これを知りて氷免帰るは茶能



つうてそよ用ひえさうとこれとらふ九月を時とて多野嶺
雜の象圖のど

⑤坊々本朝 ちまひ浄殿なり 劉璋が秋名に坊ハ別
屋らうと有 秋氏要覧に坊々區院やとらう然るに佛
の種子本坊といへるも理よ於るいふらば故又 ちまひ
館舎と春文の坊とちまひとちまひとて坊とちまひなり
ちまひより浄代と志し居るはと前坊とちまひなり又四民の
幼児と坊と称するは遠き備論を偶申らう又雲あ群乃
乃御の御人何坊某の坊と自称するも又雅とまらるる

よハ不分明なりとそ也

⑥食卓と食物をさるる机の名なり食卓をさるる
を清土の洒落とまらるる人々の似合ぬ所とらうお食卓
感と卓とまらるるつて食物の名と思へるは似合と感人の
これとこれと入らうやおぼもま本朝の風と浄掃上らうと
食膳配膳とらうととらうとらうとらうとらうとらうとらうと
食卓とらうととらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうと
お食卓幾内と流布とらうととらうとらうとらうとらうとらうとらうと
をさるる坊とらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうと

大碗十二の食卓と料理（いり）、弘（ひろ）をたるこれ（ま）、所作（しよ）、浪（なみ）、た（た）、その
食卓料理名の初（はつ）とや、赤（あか）き清（きよ）娘（むすめ）とんとつる老（らう）婆（ば）と
源（げん）とを命（いのち）せり、則（すなは）今の佐（さ）野（の）屋（や）の祖（そ）とつる大（だい）坂（さか）と彼（かれ）是（これ）
食卓料理教（しよ）ふひろめられも野（の）堂（どう）町の貴（き）得（とく）無（む）と久（きう）
末（ま）は（は）きたる（きたる）と（と）

⑤ 扇（あふぎ）とと紫（むらさ）の組（ぐみ）とと藤（ふじ）敷（しき）は、徳（とく）角（かく）路（ろ）の徳（とく）とつる
りの陽（やう）明（めい）家（け）、清（きよ）娘（むすめ）とや、傳（でん）教（きょう）傳（でん）の行（ぎやう）とと徳（とく）とつる
風（ふう）流（りゅう）とつる、お世（よ）倍（ばい）陽（やう）明（めい）家（け）とつる、往（わう）昔（しやく）大（だい）内（ない）表（ひょう）の
陽（やう）明（めい）家（け）、通（とう）とつる、別（べつ）殿（てん）とつる、は（は）は（は）た（た）とつる、

いふる、とつる、やい、お世（よ）倍（ばい）陽（やう）明（めい）家（け）、通（とう）とつる、別（べつ）殿（てん）とつる、は（は）は（は）た（た）とつる、
⑥ 秋（あき）毎（まい）の、世（よ）代（だい）世（よ）とつる、の、香（かう）の、物（もの）は、大（だい）根（こん）とつる、限（げん）とつる、食（し）食（じ）
の、とつる、食（し）食（じ）とつる、口（くち）の、真（ま）音（おん）とつる、とつる、おろ、け、大（だい）根（こん）
と世（よ）の、換（か）とつる、帯（おび）とつる、ま、死（し）小（せう）人（にん）、東（とう）山（さん）殿（てん）とつる、清（きよ）娘（むすめ）とつる、とつる
を、の、換（か）とつる、ひ、侍（しやく）し、とつる、予（よ）先（せん）年（ねん）、京（きやう）高（かう）の、水（みづ）とつる、各（かく）とつる、行（ぎやう）とつる、事（じ）
有（あ）し、とつる、ま、に、橋（はし）性（じやう）心（しん）流（りゅう）の、人（ひと）とつる、お、み、氏（し）とつる、とつる、由（ゆ）結（むす）とつる、ら、とつる、人（ひと）
とつる、行（ぎやう）とつる、れ、とつる、た、物（もの）、侍（しやく）とつる、侍（しやく）とつる、お、松（まつ）清（きよ）とつる、とつる、の、とつる、とつる、
出（で）とつる、とつる、通（とう）の、とつる、の、とつる、び、抽（ちゆう）凡（ぼん）とつる、お、大（だい）根（こん）、粟（あ）とつる、とつる、の、味（あじ）、鳴（なり）
とつる、清（きよ）とつる、物（もの）、とつる、名（な）の、お、とつる、とつる、は、とつる、とつる、お、ぬ、れ、とつる、とつる、

このいそろろと大なる松縁のその諸國(せんこく)の紀州(きしゅう)より出
 たりいぬる泉南(せんなん)の山谷(さんく)より他(た)に出るの者(もの)ありじうく物(もの)
 は漬物(つけもの)とその他(た)の食物(しょくじつ)をお出(おし)して其(その)頃(ころ)をそよ飛(ひ)の工(こう)
 和泉(いづみ)の松(まつ)とをむてふるれをばやらん松(まつ)とたの(たの)む(む)び(び)ま
 末本(すえほん)の松(まつ)とをむてふるれをばやらん松(まつ)とたの(たの)む(む)び(び)ま
 粟(あわ)の香(かう)の物(もの)をぬなるの(の)より松(まつ)も年(とし)をゆる(ゆる)り(り)とせざる
 その色(いろ)鹹(かん)とぬ(ぬ)は(は)其(その)制(せい)をぬ(ぬ)は(は)じ(じ)に(に)と味(あじ)香(かう)と搗(こ)て(て)と解(かい)
 よくた(た)は(は)須(す)雷(らい)本(ほん)とを(と)実(まこと)と(と)宜(よろ)と(と)め(め)て(て)其(その)味(あじ)香(かう)の(の)ゆ(ゆ)く
 條(じょう)粟(あわ)と精(せい)の(の)ち(ち) 倍(ばい)と(と)年(とし)を(を)し(し)て(て)出(い)せ(せ)ば(ば)粟(あわ)の(の)ち(ち)を(を)し(し)

味(あじ)香(かう)の(の)味(あじ)と(と)混(ま)して(して)一塊(いつくわい)の(の)以(も)て(も)養(やしやう)漬(つけ)の(の)で(で)も(も)香(かう)の(の)物(もの)と(と)ま(ま)れ(れ)り
 こ(こ)ぞ(ぞ)こ(こ)も(も)す(す)る(る)実(まこと)と(と)右(みぎ)の(の)制(せい)する(する)る(る)や
 秋(あき)并(なら)び(び)た(た)り(り)つ(つ)る(る)は(は)ま(ま)よ(よ)み(み)香(かう)の(の)物(もの)と(と)く(く)け(け)ん(ん)根(こん)と
 つ(つ)人(ひと)尻(しつぽ)を(を)よ(よ)ぎ(ぎ)る(る)冷(ひや)る(る)屠(と)殺(ころ)献(けん)的(てき)の(の)人(ひと)よ(よ)け(け)ん(ん)根(こん)と(と)下(した)
 る(る)こ(こ)も(も)す(す)る(る)れ(れ)或(ある)東(とう)山(さん)殿(でん)物(もの)救(きう)す(す)る(る)れ(れ)か(か)か(か)み(み)と(と)漬(つけ)物(もの)
 よ(よ)し(し)と(と)お(お)さ(さ)る(る)例(れい)的(てき)の(の)が(が)英(えい)雄(ゆう)を(を)欺(あざむ)く(く)杜(と)撰(せん)する(する)じ(じ)
 (甲)南(なん)嶺(りやう)に(に)尾(び)の(の)天(てん)野(や)氏(し)の(の)境(さかい)瓦(わ)と(と)物(もの)と(と)味(あじ)香(かう)の(の)味(あじ)と(と)ま(ま)れ(れ)り
 幸(さい)よ(よ)ま(ま)り(り)女(にょ)人(にん)の(の)お(お)け(け)り(り)關(かん)本(ほん)あり(あり)僅(わずか)く(く)一(いち)條(じょう)を(を)た(た)り(り)し(し)て(て)
 此(こ)の(の)杜(と)撰(せん)の(の)ち(ち)を(を)て(て)偽(いつはり)書(か)なり(なり)や(や)ま(ま)と(と)偽(いつはり)書(か)の(の)味(あじ)香(かう)の(の)味(あじ)と(と)ま(ま)れ(れ)り

野々子今新事妻の齟齬天壤の差なり此も之の
 事の人出たは極るおとてゑるをうりたうりその極る
 の記を物ららば見ん人をあひひつべし天野成りたる
 くとみはれを思がはしつらつ附會の依書と見る思
 うん書をおおせし人も今俗をさうじしが審し然
 本かざうら

野々子今新事妻の齟齬天壤の差なり此も之の
 事の人出たは極るおとてゑるをうりたうりその極る
 の記を物ららば見ん人をあひひつべし天野成りたる
 くとみはれを思がはしつらつ附會の依書と見る思
 うん書をおおせし人も今俗をさうじしが審し然
 本かざうら

ろの屈伏せられて後人をぞく巫覡もは彼者の転る
 村老もはしとせんをさくたを筆せしと是と針後をもど
 せし後入未育りそ野狐性も第一と曰ゆ老狐性人
 情人筆と知り博く書よ侍る事り同とて言ふはや言と
 中これらもが野狐の曰行とも同く言ふなりと云生年
 の曰ゆ海宿の中より曰ゆら入るまらつていあやと同れし
 と此野狐ありひがけをきこるを屈せる神なりとされは生
 の曰是式のこふ屈し何程万巻の書を誦したるも
 何の用よとてまてて説野狐性の人と宣ふよと云る也

頼りよむせふれいふ野狐をらむる退ぞきしとせしむそ
 のあきらめ人の意の表よ事奉るふりしりるまの老
 狐やうの暗記して人と能くそゆとゆの事とめて座
 伏せし英邁の才卓見の量るの過凡庸の傷にわら
 ざり事と

幸天王寺村之本朝之大村やして凡出作も万石を儲る
 知るう故より教も教ふ形なりを初會に徳記するゆとそ
 頼りよむ天王寺村の鶴頭と販者そ人もは村老のそふ
 聖徳太子の鶴頭を嫌ひてり解返鶴頭を制するもの



ありてもし慈とれ蒸氣より腐アと物と云傳入梅ぶるに
 鶴頭を宋の林和情が末裔日本本より南都にて初て制
 せしと信瀬鶴頭と云別服紗作と如く系抄より孫あり
 湖まこと百年は越ゆる人を聖徳太子の存在の目に見ても
 志むらぬやうにうと嫌ひ流るや室友を断てかゝことを截れり
 孫にらせしなどの後ひしといふ大なるおまほるらん
 此鶴頭やと組と字二と云初る節用集と著述世に
 せん本と見ゆりしが勇事書よ明後二年と有るり
 申せと二百八十年たまるこれ遠藤の祖初らんと

町並、傳をせしむるから傳をも傳はるるも

まじり

① 夏の日、夜は、花の、影、の、り、即、ち、ま、る、か、ら
傳、作、り、し、は、字、を、も、つ、り、傳、を、書、き、の、り、轉、じ、て、ま、る、と
失、し、其、の、り、依、る、保、る、と、り、ま、事、押、し、ま、と、り、ま、は、る、
是、等、の、り、ま、る、と、り、

② 他、の、え、よ、ゆ、を、ま、用、の、長、を、ま、る、と、り、自、他、の、音、を、ま、る、と、り、
が、工、高、の、流、お、て、際、を、ま、る、と、り、世、を、ま、る、と、り、の、り、ま、る、と、り、
な、な、ぬ、の、り、の、り、ま、る、と、り、長、を、ま、る、と、り、

ま、る、と、り、の、り、ま、る、と、り、

栞卷後章二編二終

